

会員の広場



三陸・岩手を旅する

高田 英生（東京）

道中の大半を全線開通した三陸鉄道に委ねて八戸から一関まで三陸海岸に沿って旅をした。まだ、山間に桜が見られる時期、曇天がちのゴールデンウィークであったが晴間に見える太平洋はどこまでも青く美しかった。

旅の楽しみは、風物とともに、食べ物もその一つ。朝ドラ「あまちゃん」で有名になった北限の海女漁、三陸鉄道久慈駅での「うに弁当」、鮮度が命の「ほや」の刺身など、海の幸山の幸を行く

先々で楽しめた。

東日本震災の二年後、二〇一三年に訪問した罹災地は、タンプカーが引きも切らず、重機があらちらこちらで轟音を立てていた。それから九年がたった。タンブ、重機はあまり見かけなくなり、主要な施設は再建・整備されているようだが、まだ、道路などの工事が沿線や港で行われていた。また、上物を待つばかりの宅地もまだ見受けられた。罹災の状況、復旧のプロセスについて、高田松原津波復興祈念公園の津波伝承館の展示物や解説は生々しくも、わかりやすかった。

宮古市田老では巨大な防潮堤群にも驚かされるが、保存されている「津波遺構たろう観光ホテル」は、その外観からも津波の威力や恐ろしさが伝わってくる。新田老駅近くの常運寺には津波・海嘯の慰霊碑がいくつもあった。

そのあと、浄土ヶ浜を訪ねた。海原と白い岩礁・

砂浜が織りなす風景は三陸を代表する景勝地に違わなかった。

釜石では日本製鉄の建物等のファサードが駅を降り立つ人を圧倒する。

釜石市郷土資料館で「津波記念碑」という企画展を開催中であった。津波罹災の歴史と市内にある明治二十九年、昭和八年の津波石碑と東日本大震災の津波記念碑の写真などが展示されていた。石碑の碑銘には、合祀か、後々建立されたものを除き、明治二十九年のものは「海嘯」、昭和八年

のものは「津波」の文字が刻まれている。

今回の旅の最後の訪問地は、新幹線に乗り換える一関。駅を降り立ってすぐ迎えてくれるのが、大槻三賢人（玄沢、磐溪、文彦）の像。釣山公園、一関藩家老職沼田家武家住宅、酒の民俗文化博物館などを見て、お昼は名物のひと口もち膳、ゆるりと市内観光を楽しんだ。

北上川、磐井川の川辺に、往古から独自の文化を花開かせた一関、水運などにより、人物の往来も多かったようだが、河川の氾濫にも大変悩まされ、藩財政はかなり厳しかった。先の沼田家住宅も質素なつくりである。江戸時代より北上川流域の本格的な治水・利水事業が始まるも、その後も洪水に脅かされ、戦後、台風による大水害を契機に一関遊水地が計画され、事業が進められている。司馬遼太郎は、砂金、名馬、磁鉄鉱でもってこの地帯は明治以前までの日本史に参加し、大きな影響をあたえるのだが、残念ながら人間は明治以後に出てくる、と語っている。都から遠かったことの言いようとも思われるが、もともと冷涼な氣候風土の中で、折々の厳しい自然の営みを相手に暮らしてゆくことは並大抵のことではなかった。久方ぶりの旅行は、三陸・岩手の風土・歴史とここに息づく人々に思いを馳せる旅となった。